

2019年度グローバル会計学会賞

本田 良巳著『ヨーロッパの会計規制』

(中央経済社, 2020年2月1日刊行, 389頁, 6,000円)

【推薦理由】

本書は、EUの公式文書に依拠しつつ、会計に関連する問題、とりわけ会計(基準)指令、国際会計基準、監査、税務等の問題を歴史的に、体系的に、かつ相互関連的に考察することにより、ヨーロッパにおける会計規制の現状を究明しようとするものである。

本書の特徴は、次の3点にある。第1に、EU会計制度を形成するEU指令がどのように新設され改正されてきたかを、関連文献及び資料の原典の広範な渉猟に基づいて丹念に跡付け、1970年代以降の会計規制研究のギャップを埋める点に、歴史的及び文献的価値がある。第2に、従来、上場企業の連結決算書に焦点を置いたEU会計規制問題に対して、マイクロ企業をも意識して、マイクロ企業にも適用される会計基準指令と上場企業向けIAS規則との2つの方向、二重の戦略を現代の会計規制の中に見出す点は、斬新かつ独自性をもつ。また、第3に、本書が、監査、中小企業、税務と幅広く、その視点が、総合的、体系的である点においても意義が大である。

以上、研究課題の歴史的意義、研究視点の斬新性、及び研究スケールの大きさなど、本書はグローバル会計研究への貢献が著しく大であるとして、本審査委員会は学会賞を授与するものである。

岡本 紀明著「学際的会計研究の動向と展望—遂行性の概念に焦点を当てて—」

『グローバル会計研究』第1号, 2019年7月

【推薦理由】

本論文は、定量的実証研究が会計研究の主要な潮流をなす中、より定性的な学際的な観点から、代表的な先行研究のレビューを通じてその学術的意義を明らかにし、会計研究の新たな発展可能性を探究しようとするものである。本研究の特徴は、次の3点である。第1に、グローバル会計では、アーカイバル研究では解明できない社会的、文化的、政治的側面の研究が重要であることから、そのような側面を取り扱う学際的研究のあり方と方向性を示した点は新鮮かつ斬新である。第2に、学際的会計研究を構成する政治的観点、正統性理論、及びグローバル・ガバナンス論の3つの観点に取り纏めるとともに、それを遂行性の概念(理論やモデルは、特定の対象を描写するのではなく、その対象自体に作用するという考え方)を用いて、会計研究への適用可能性を提示する着想は、斬新である。第3に、従来、グローバル会計研究における学際的研究の重要性は広く指摘されてきているが、その具体的可能性や方向性は必ずしも明確ではなかった。それに対して、本論文は、今後の研究に1つの方向性と発展可能性を提示している。

以上、課題の重要性、着想の斬新性、及び研究の発展可能性を有することから、本論文はグローバル会計研究への貢献が顕著であるとし、本審査委員会は学会賞を授与するものである。